

# 北野散布地第 13 次

—民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2023 年 3 月

福崎町教育委員会

## あ い さ つ

福崎町は古くから交通の要衝として栄え、周囲を豊かな山林に囲まれ、中央部を清流市川が流れおり、その東西それぞれに市街地が形成されてきました。

近年、福崎町内でも宅地開発や商業施設、土地改良などの開発事業に伴い、埋蔵文化財の調査件数が増えてきています。北野散布地でも個人開発が増加し調査を実施してまいりました。このたび調査を行った13次調査では弥生時代中期の掘立柱建物や縄文土器の出土など新しい成果が得られ、新しい事実が明らかになってきています。

このたび、平成2年度に実施しました民間開発に伴います北野散布地の発掘調査成果をまとめ、報告書を刊行致しました。広くご活用いただき、みなさまにとって郷土の歴史・文化への理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり地元関係者をはじめ、多くの方々にご理解とご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

令和5年 3月

福崎町教育委員会

教育長 高橋 涉

### 例 言

1. 本書は民間開発事業に伴って調査を実施した兵庫県神崎郡福崎町西田原字向下広岡に所在する北野散布地第13次の発掘調査報告書である。
2. 調査は、令和2年度に確認調査を実施し、同年に本発掘調査を行った。調査は福崎町教育委員会が実施した。
3. 経費は確認調査については国庫補助金を充て、本発掘調査は事業主体者が負担した。
4. 本書に使用した方位は基本的に磁北で、標高は福崎町設定の基準点を使用している。
5. 発掘調査は有限会社松浦興業に委託した。
6. 本書に掲載した図のうち遺跡位置図は福崎町発行の都市計画図（1/10,000）を、調査区配置図は福崎町都市計画図（1/1,000）を編集したものである。
7. 合わせて平成30年度に民間開発に伴う北野散布地第8次調査成果も既往調査の中で報告を掲載した。
8. 執筆編集は梶・福永・原井川・常陰の協力を得て渡辺が行った。
9. 本報告に係る図面、写真、遺物等は、福崎町教育委員会にて保管している。
10. 調査・整理作業において多くの方々や機関にご助言・ご指導・ご協力をいただいた。感謝します。

地元北野区の方々、調査に参加いただいた方々、工事関係者の皆様には感謝します。



図1 福崎町の位置

## 本文目次

### Iはじめに

1 遺跡調査の経緯	1
2 既往の調査	2
3 調査の経過	13
4 整理作業の経過	14
5 周辺の環境	15

### II 調査結果

1 調査の概要	18
2 遺構	18
3 遺物	26
III おわりに	30

## 図目次

図 1 福崎町・北野散布地の位置	i
図 2 北野散布地調査地点図	2
図 3 第4次調査と第5次調査の位置	3
図 4 第4次調査実測図	3
図 5 第5次調査平面図	4
図 6 第8次調査平面図	5
図 7 第8次調査遺構実測図	6
図 8 第10次調査実測図(1)	9
図 9 第10次調査実測図(2)	10
図 10 第10次調査遺物実測図	11
図 11 北野散布地の位置と周辺の遺跡	16
図 12 北区平面図	18
図 13 第13次調査平面図	19
図 14 北区土層断面図	20
図 15 北区遺構実測図	21
図 16 南区平面図	22
図 17 南区土層断面図	23
図 18 南区遺構実測図(1)	24
図 19 南区遺構実測図(2)	25
図 20 遺構出土遺物実測図	27
図 21 包含層出土遺物実測図	27

# I はじめに

## 1. 遺跡調査の経緯

北野散布地は兵庫県神崎郡福崎町西田原字北廣岡・西廣岡・向下廣岡・向上廣岡に広がる遺跡である。福崎町では昭和 51 年から土地改良事業が継続して行われており、当該地周辺でも播但自動車道東側の西大貫遺跡の調査を平成 3 年度に実施したのを皮切りに、平成 4 年度には大門遺跡・大門岡ノ下遺跡・北野寺西遺跡・北野寺山西遺跡の調査が行われ、平成 5 年度には北野寺西遺跡・北野寺山西遺跡・東広畠古墳・東新田古墳の調査が行われ、平成 6 年度には上大明神寺遺跡・大畠古墳群・西田原穴田遺跡・北野寺西遺跡の調査が行われた。この間に次年度以降施工予定の分布調査と確認調査が頻繁に実施されていた。その後平成 11 年度までは土地改良事業に追いついて調査を行なってきたようである。

福崎町では北野周辺の土地改良事業とは別に雲津川の改修工事に合わせて土地区画整理事業計画を策定段階にあった。東西方向の交通整備なども目的とするもので、それに際して福崎町教育委員会では分布調査を実施した。調査は出田 直・北村佳世・上月基子が担当した。平成 9 年 3 月 18 日～23 日に行われ、ほぼ全域で高密度に遺物が採集された。石縄や弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器類と幅広い時期の遺物が採集され、ほぼ全域を北野散布地として遺跡登録がなされた。調査段階の聞き取りで雲津川から五輪塔や宝篋印塔の残欠が出土した情報を得たことは、遺跡の性格を考える上に重要である。

## 2. 既往の調査

分布調査の結果、ほぼ全域が遺跡範囲とされた。事業そのものは進捗せず、それ以外の開発に際して今までに 13 回の調査が行われている。確認調査ののち本調査を行った場合も次数に入れており、地点でいえば 9 地点で調査が行われており、3 回の本調査をしている。(図 2 ならびに表 1)

第 1 次調査は平成 12 年に集合住宅建設に伴って確認調査が行われ、明瞭な遺構は確認出来なかつたが繩文土器の小片が出土している。第 2 次調査は個人住宅建築に先立つて調査を行つたが遺構・遺

次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	遺構	遺物	文献
1	字向下広岡900-1	平成12年11月16日	集合住宅	16	なし	縄文土器	
2	字北広岡626-1	平成21年12月8日	個人住宅	4	なし	なし	町報告10
3	字西広岡998	平成27年7月5日	宅地造成	12	落ち込み	陶器	町報告15
4	字向下広岡688	平成29年4月12日	集合住宅	12	溝・土坑	弥生土器	町報告17
5	字向下広岡688	平成29年4月25日～5月11日（4日間）	集合住宅	250	整穴住居・掘立柱建物・樋・土坑	弥生土器・土師器・須恵器	町報告18
6	字向下広岡967	平成30年9月12日	太陽光発電	8	なし	なし	町報告20
7	字向下広岡965	平成31年1月21日	宅地造成	8	ピット	なし	町報告20
8	字向下広岡965-1	平成31年2月12・13日	宅地造成	23	溝・土坑・ピット	弥生土器	本報告
9	字西広岡1002	令和2年1月20日	土地造成	4	なし	土師器	町報告23
10	字向下広岡898	令和2年11月4日	宅地造成	32	ピット・土坑	弥生土器	町報告26
11	字向下広岡65-1	令和3年1月28日	宅地造成	4	なし	なし	町報告26
12	字向下広岡952-4	令和3年1月29日	携帯電話基地局	2	なし	土師器	本報告
13	字向下広岡898	令和3年3月8日～15日（6日間）	宅地造成	470	掘立柱建物・樋・溝・土坑	弥生土器	本報告

表 1 北野散布地調査一覧表

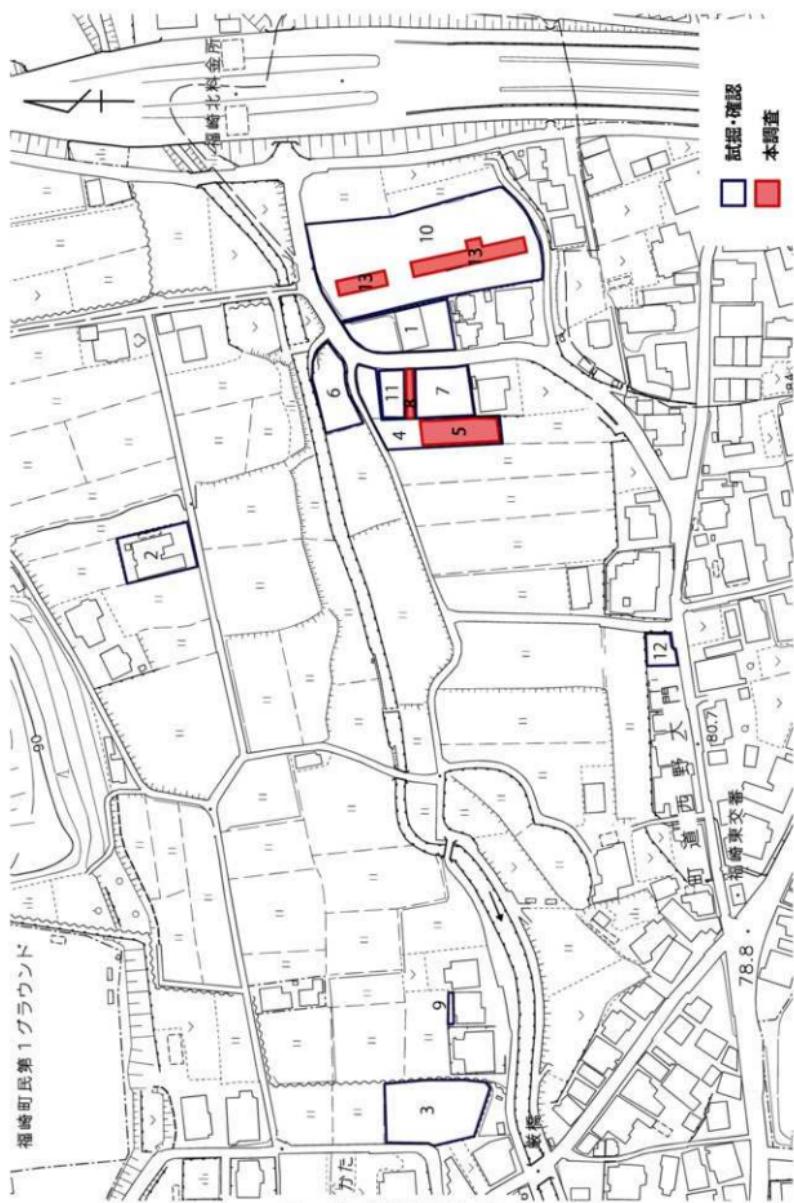


図2 北野散布地調査地点図

物は確認されなかった。下層でも水田土壌が確認されており、水田域であった可能性が高い。第3次調査は宅地造成工事に伴って調査され、近代の落ち込みが確認されている。埋め桶などの生活関連の遺構の可能性が高く、陶器などが出土し新しい時期の遺構である。

第4次調査は集合住宅建設に伴って実施し、弥生時代の溝・土坑を確認した(図4)。集合住宅にかかる部分を本調査対象範囲(図3)とし、第5次調査として本調査を行った。擁壁部分は遺構面に達しないことから工事段階の立会調査で対応している。第5次本調査では切り合い関係のある建替えしている2棟の弥生時代後期末の竪穴住居と同時期の掘立柱建物1棟・柵1条を調査した。遺跡は継続せず、平安時代後半に再開し土坑と柵を確認した。土坑からは4点以上重ねた状態で東播系須恵器碗が出土した(図6)。

第6次調査は雲津川沿いの水田で太陽光発電に伴って調査したが、洪水堆積層で遺構・遺物は確認出来なかつた。第7次調査は第5次調査東側の宅地造成工事に伴う調査である。耕土の下に暗黒シルト質細砂があり、第3層が地山で遺構面である。ピット1基を確認し遺構面が続いていることを確認したが希薄である。南側は地形的に削平されている可能性が高い。遺構面が保全出来ない部分については調査が

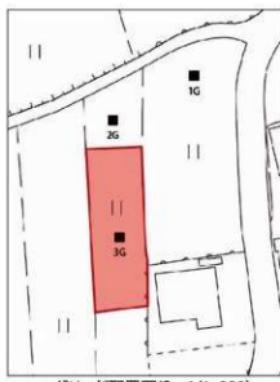


図3 第4次確認調査と第5次本調査

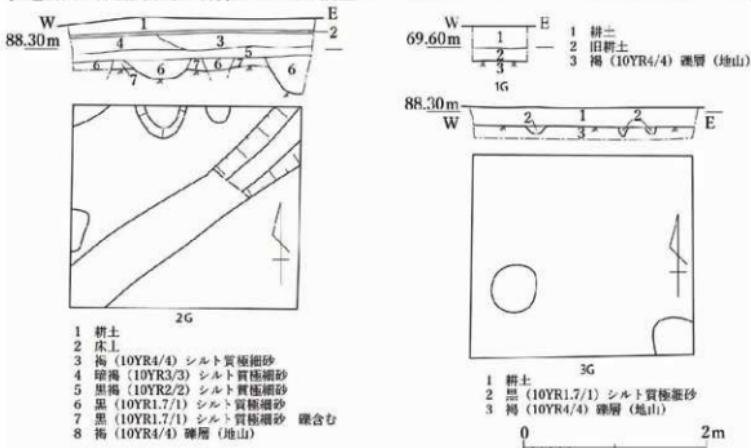


図4 第4次調査実測図

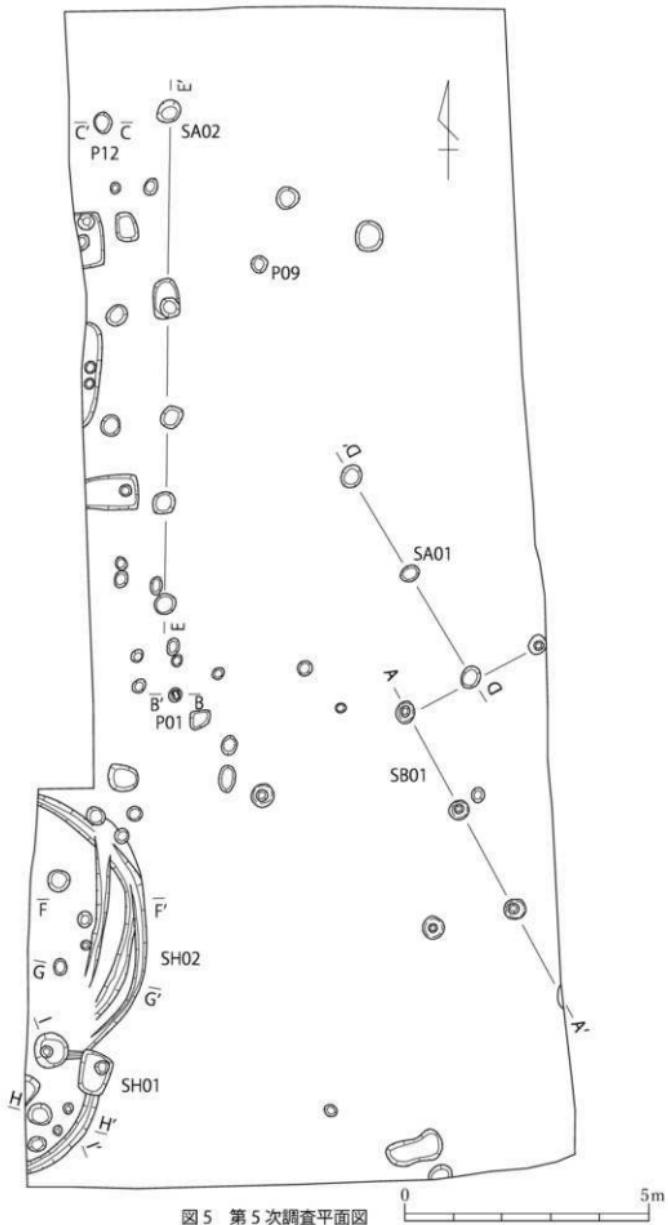


図 5 第5次調査平面図

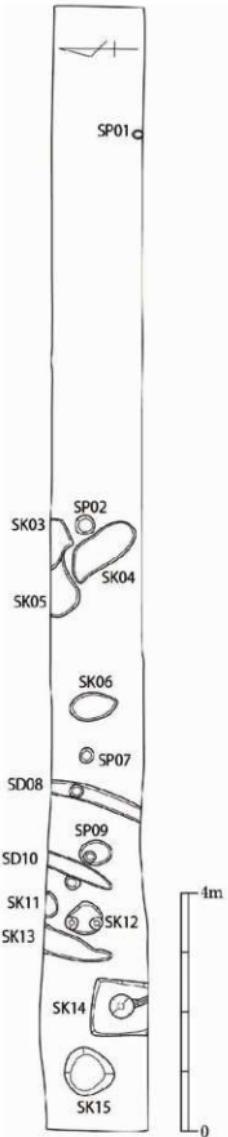


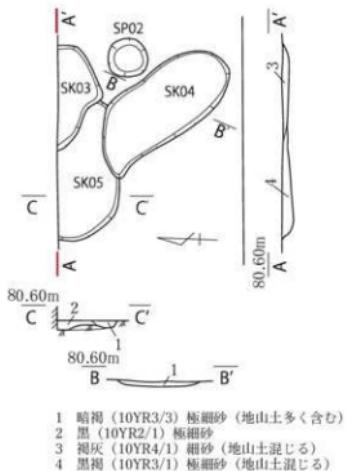
図6 第8次調査平面図

必要であるが、盛土工事であったことから、掘削を伴う擁壁部分について本調査を第8次調査として実施した。幅1.5mで長さ19mの28.5m<sup>2</sup>の調査区である。検出した遺構は溝3条、土坑8基とピットである。溝は調査区西側に位置し、南北方向に延びている。SD08は弧状になり最大幅0.3m、深さ0.1mを測る。西肩は直線的で、東肩が弧を描き南北両方に続いている。溝底に径0.2mのピットが築かれている。SD10は北側に延びる南北溝で、幅0.3m、深さ0.1m、長さ1.1mを測る。SD13は北側が広く南に向かって狭くなっていく。調査区内で端部が確認出来1.2mを測る。最大幅は北壁沿いで0.55mを測る。土坑は8基調査したが性格の判る土坑はない。不定形か円形・方形と変化がある。SK03～SK05の3基は切り合っている。3基は不定形で底面に凹凸があり浅い。自然堆積の可能性も残る。SK06は椭円形で南側が尖った最大幅0.5m、長さ0.8mで深さは0.1mである。SK11・SK12はSD10とSD13の間に位置する円形土坑である。SK12にはピットを2基伴っている。SK14は方形プランの中に円形の土坑があり、円形土坑から南側に溝が延びている。生活施設の遺構かと思われるが明らかではない。焼土・炭などは伴わず、滯水状態であるという判断も明確に出来ない。少し歪な方形で北辺1.1m、南辺0.8m、西辺1.0m以上である。中央の土坑は径0.4mの円形で深さ0.35mを測り、直に下がらず北西方向から南東方向に傾いている。SK15は西端にある径0.8mの歪な円形土坑で深さ0.2mを測る皿状である。

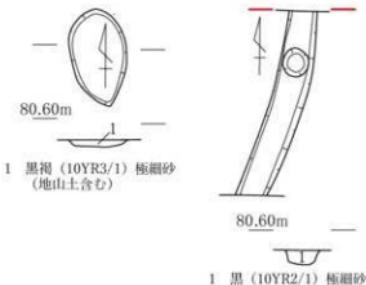
第9次調査は遺跡西端に近い3次調査東側の個人住宅建て替えに伴って調査した。明確な遺構は検出できなかったが、遺構面は確認出来た。土師器が出土しており、遺跡の西端かと思われる。

第10次調査は本報告の本調査を行った第13次調査の確認調査である。詳細は福崎町埋蔵文化財発掘調査報告26で報告しているので参照戴きたい。令和2年11月4日に8か所のグリッドを設定したところ、北東部分のG2から中央北側に設定したG4にかけては後世の擾乱を受けていることが判明した。現代の擾乱と思われ、播但自動車道建設時の関連工事で手が加わったと言われるが確実ではない。

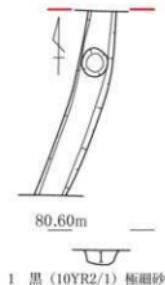
### SK03・SK04・SK05



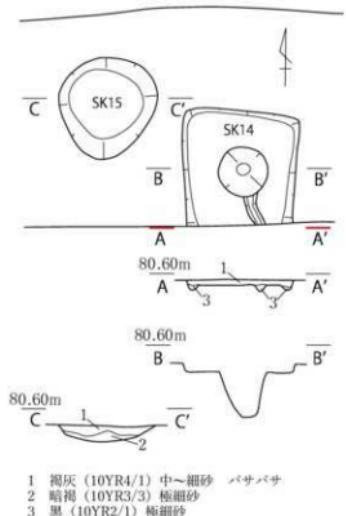
### SK06



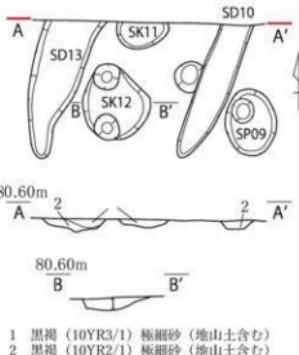
### SD08



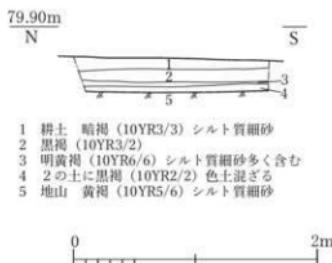
### SK14・SK15



### SK11・SK12・SD10・SD13



### 東壁



0 2m

図7 第8次調査遺構実測図

## 第8次調査写真



調査前（東から）



重機掘削



作業の様子



東壁



SK05 断面（西から）



SK05 弥生土器出土状況



SK11 断面（南から）



SK12 断面（南から）

第8次調査写真



SK14（北から）



SK15 断面（南から）



全景（南西から）



全景（南東から）

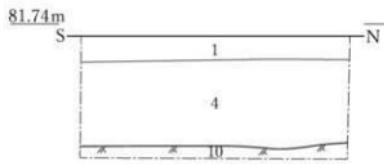
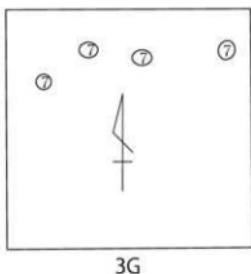
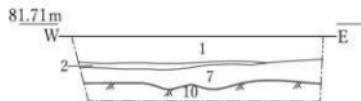
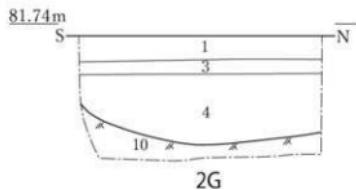
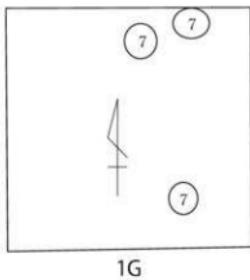
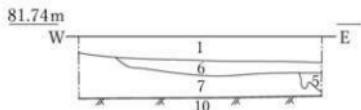
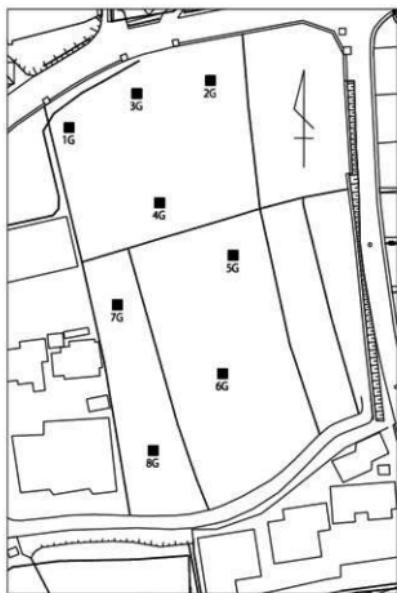
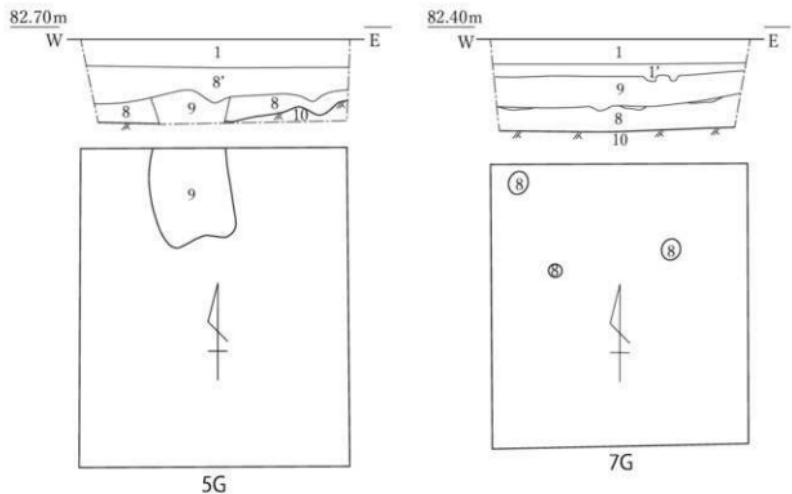


図8 第10次調査実測図(1)



- 1 耕土  
 1' 旧耕土  
 2 床土  
 3 改良土  
 4 造成土  
 5 にふい黄褐 (10YR4/3) シルト質粗砂  
 6 黒褐 (10YR2/2) シルト質粗砂 (耕土混ざる)  
 7 黒褐 (10YR2/3) シルト質中砂 (包含層)  
 8 黒褐 (10YR2/3) シルト質極細砂  
 8' 黒褐 (10YR2/3) シルト質極細砂 (明黄褐色土の粒含む)  
 9 黒 (10YR1.7/1) シルト質極細砂 (包含層)  
 10 地山



図9 第10次調査実測図(2)

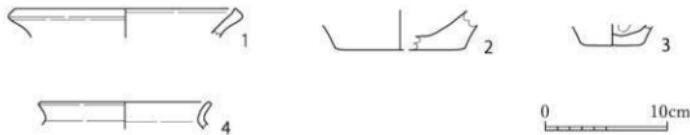


図 10 第 10 次調査遺物実測図



第 10 次調査出土遺物

番号	種別	器種	調査区	法量 (cm)			調整		備考
				口径	器高	底径	外	内	
1	土師器	壺	7G	(18.0)	残2.4		ヨコナデ		
2	弥生土器	壺	8G		残3.2	(9.4)			
3	弥生土器	壺	5G		残1.8	(4.8)			
4	弥生土器	壺	6G	(13.8)	残2.2				

表 2 第 10 次調査出土遺物観察表



調査前の状況（北西から）



調査前の状況（南東から）



機械掘削



作業のようす

第10次調査写真



1G (南から)



2G (東から)



3G (南から)



4G (東から)



5G (南から)



7G (南から)



8G (南から)



埋め戻し状況

それ以外については遺跡が存在することが明らかになった。削平を受ける部分について調査の必要が生じた。道路部分について本調査を後日行ったのが本報告である。個々の分譲住宅については個別協議であるが、造成工事については擁壁部分も含めて遺構面が保全されることが確認出来たので調査対象にはなっていない。(図 )

第 11 次調査は第 8 次調査の北側であるが、遺構面は確認出来なかつた。第 11 次調査北側で調査を行つた第 4 次調査でも遺構・遺物は確認していない。第 12 次は現在の集落部分に当たり、遺跡中央南端部分にあたる。携帯電話基地局設置の立会調査である。小面積であったが、上層は盛土で下には疊層があり、遺構面は確認出来なかつた。



掘削作業



上部バックホー部分断面



掘削土



下部オーガ部分断面



掘削終了



調査区北側崖面

#### 第 12 次立会調査写真

##### 調査の経緯

確認調査の結果を返答し、開発業者と協議した。道路部分が調査対象となり、確認調査で一部遺構面がすでに削平され、遺構面が残存していない部分がある。そこを除いた地域が調査対象として協議を行つた。擁壁部分や造成部分については盛土ならびに耕土床土の深度で掘削が行われることから調

査対象外とし、慎重工事で対応することとした。早急に本調査を依頼されたが、福崎町教育委員会では高岡・福田地区は場整備事業に伴う発掘調査を実施していたことから、即応することは出来なかつた。その結果、ほ場整備調査終了段階もしくは可能な時期の年度内調査を依頼され、そのように行うこととした。長野多イ谷遺跡を調査していたが、空中写真撮影を行い断面調査も終了し、埋戻し前に調査を行うこととした。令和3年3月8日から15日の実働6日間行つた。調査経費は事業者の島谷不動産負担により、島谷不動産と(有)松浦興業との間で契約を交わし調査を実施した。

#### 令和2年度調査体制

調査主体 福崎町教育委員会

教 育 長 高橋 渉

社会 教育 課 長 松田直彦

社会教育課副課長 森 公宏

社会教育課係長 藤原 元

社会教育課主査 長谷川幸子

社会教育課主査 樋口 碧

埋蔵文化財専門員 渡辺 昇

整 理 作 業 員 梶 智美

整 理 作 業 員 福永明子

整 理 作 業 員 原井川奈美

整 理 作 業 員 常陰ひとみ



調査風景

#### 4. 整理作業の経過

試掘確認調査・本発掘調査と並行して随時整理作業も実施した。土器洗浄や遺構図の調整などの作業は令和2年度に行つたが、それ以降の作業と報告書刊行は令和4年度に実施し、福崎町教育委員会で町単費として発刊した。

現地説明会を実施出来ず、地元の方々にわずかに見学して頂いただけだった。そのため、令和4年2月5日～4月10日に福崎町立神崎郡歴史民俗資料館にて開催された令和3年度企画展「令和2年度埋蔵文化財発掘速報展」で紹介し、遺物・写真パネルを展示し、解説会も行つた。

#### 令和4年度調査体制

調査主体 福崎町教育委員会

教 育 長 高橋 渉

社会 教育 課 長 木ノ本雅佳

社会教育課副課長 森 公宏

社会教育課主査 長谷川幸子

社会教育課主査 樋口 碧

埋蔵文化財専門員 渡辺 昇

整 理 作 業 員 梶 智美

整 理 作 業 員 福永明子

整 理 作 業 員 原井川奈美

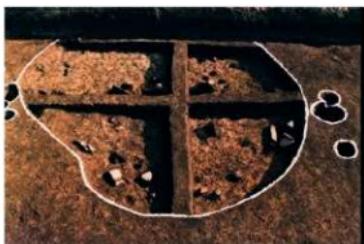
整 理 作 業 員 常陰ひとみ



企画展展示風景

## 5. 周辺の環境

北野散布地は福崎町西田原字向下廣岡周辺に所在する。福崎町域は市川の両岸に分かれて展開しており、市川の支流が流れ開析された谷を形成している。南側には隔絶はないが、他の3方向は地形的に隔絶しており、旧香寺町など旧神崎郡南半を含んだ地域が盆地となっている。北野散布地は市川東岸に位置し、市川ならびにその支流である雲津川によって形成された段丘面に遺構面が広がっている。南側に段丘面は延びており、西光寺野と呼ばれる丘陵部分であったが、新田開発によって段丘面が削平耕地化されていった。北西方向には辻川山が存在する。遺跡中央に雲津川が北東加治谷方向から流れている。調査地点は低位段丘面に位置している。



大門岡ノ下遺跡竪穴住居

北野散布地周辺は福崎町でも早くから調査が行われていた地域で縄文時代から近世の遺跡が知られている。旧石器時代の遺跡は西田原桶川遺跡でナイフ形石器が西田原櫻上池で縦長剥片が出土している。それに続く有尖頭器が西光寺で採集されている。縄文時代の遺構は後期頃からだが、遺物は町内各地で前期から晩期の土器が小片ながら出土している。西大貫遺跡や加治谷藪下五反畠遺跡(24)・南田原長目遺跡・八千種庄北挾遺跡などから出土している。今回の調査でも縄文土器小片が出土している。遺構は八千種庄北挾遺跡・八千種庄古屋敷遺跡・林谷遺跡から落とし穴群が調査されている。細かい時期決定は難しいが後期であろうか。竪穴住居は大門岡ノ下遺跡(25)で晩期の円形住居が調査されており、石棒が出土している。林谷遺跡では、石毬などの石器がやまとまって採集されている。

弥生時代になると、前期の土器は南田原条里遺跡・中溝遺跡で出土している。2遺跡とも遺構は溝だけで、中期前半の遺構は南田原長目遺跡だけである。中期後半になると遺跡も各地へ広がっていく。加治谷越前遺跡や上大明寺遺跡(4)・西広畠遺跡(5)などで、多くは後期へ引き継がれていく。今回の調査区の遺構は中期後半から後期にかけての時期である。上大明寺遺跡ではガラス小玉が出土している。上大明寺遺跡の東側丘陵部に位置する宮山遺跡(26)では土器棺や糊圧痕の付いた破片や山陰地方との交流を示すスタンプ文の施された破片が出土している。北野散布地の北東方向にある北野寺西遺跡(18)では円形周溝墓が調査されている。終末の土器が宮ノ前遺跡・福田東田黒遺跡・西治下代ノ下モ遺跡・中溝遺跡や福田町田、馬田スガキ、山崎で出土している。西治下代ノ下モ遺跡では古墳時代になると集落を形成する。後期に製塙土器を保有している点も注目される。上大明寺遺跡・加治谷藪下五反畠遺跡・林谷遺跡でも古墳時代の竪穴住居が調査されている。



上大明寺遺跡竪穴住居

古墳は福崎町内で確認されているが、古相の古墳は高橋にある。高橋古墳群で早い段階に鉄剣が出土したことで知られている。箱式石棺を主体部とする6基以上の中円墳で構成される。今のところ福崎で最も古い古墳と考えられているが明確でない。妙徳山遺跡の箱式石棺と大善寺古墳も古いと言われるが確実ではない。鉄剣出土古墳が最古であることは確かであろう。次の古墳は相山古墳であり、後期に

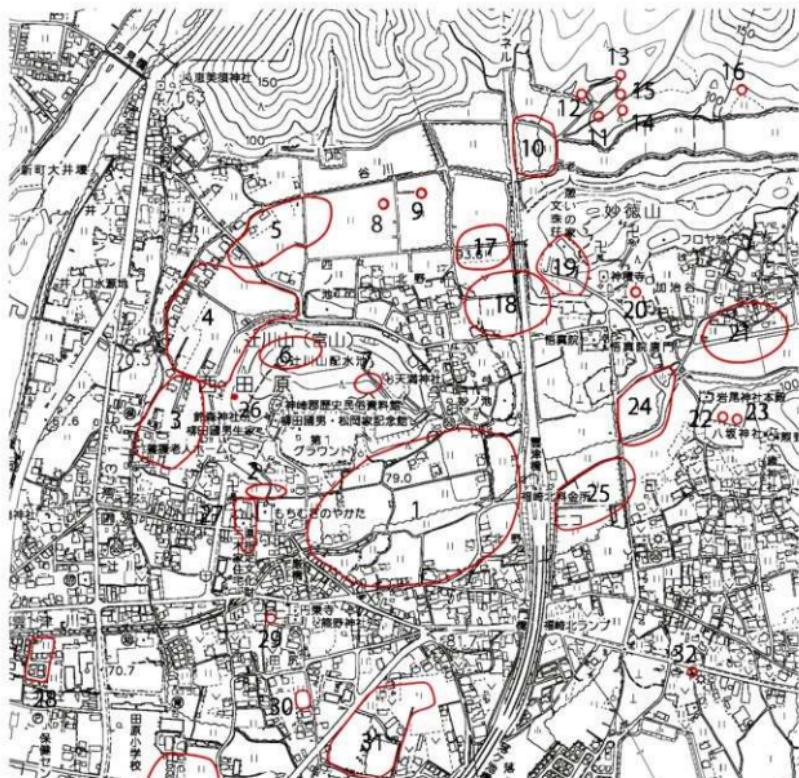


図 11 北野散布地の位置と周辺の遺跡

1 北野散布地	12 大烟 2 号墳	23 ピワクビ 2 号墳
2 上板遺跡	13 大烟 3 号墳	24 加治谷藪下五反烟遺跡
3 下大明寺遺跡	14 大烟 4 号墳	25 大門岡ノ下遺跡
4 上大明寺遺跡	15 池ノ谷中池遺跡	26 宮山遺跡
5 西広烟遺跡	16 尾森古墳	27 三木家住宅関連遺跡
6 西広岡遺跡	17 北野寺山西遺跡	28 西田原堂ノ前遺跡
7 北広岡遺跡	18 北野寺西遺跡	29 田尻宮ノ西遺跡
8 東広烟古墳	19 妙徳山遺跡	30 田尻宮ノ前遺跡
9 東新田古墳	20 妙徳山古墳	31 西田原上野田遺跡
10 西田原穴田遺跡	21 加治谷前田遺跡	32 大門池ノ下古墳
11 大烟 1 号墳	22 ピワクビ 1 号墳	

なる。堅穴系の主体部の可能性が高く、埴輪を巡らす20mを越える円墳である。それ以降は主体部が横穴式石室になる。山崎所在の大塚古墳である。30m前後の円墳で、長さ12mを超す大型の横穴式石室を主体部としている。北野散布地南東部に池ノ下古墳(32)、東側にビワクビ1号墳(22)2号墳(23)、その西側に町内最大の石室である妙徳山古墳(20)北側に円頭大刀や装飾須恵器を出土した東広畑古墳(8)、豊富な鐵器・須恵器を保有する東新田古墳(9)が、その後方北浦谷に大畑古墳群(11~14)、尾森古墳(16)が築造されている。大畑古墳群の西侧の山裾にある池ノ谷中池いせきからは灰原が確認され同時期の窯跡である。市川西岸にも古墳は築造され、最初に構築されたのは山崎所在の大塚古墳である。30m前後の円墳で、長さ12mを超す大型の横穴式石室を主体部としている。大塚古墳に続く時期の大型の石室を保有する朝谷1号墳(狐塚)が残存している。その南側医王寺境内にある神谷古墳も近い時期の古墳であるが石室の高さが低くなり石室長が長くなっている。空間的には狭くなってしまい、末期の様相を示している。福田には東大谷古墳・宮山古墳・上垣内古墳・小山古墳の横穴式石室を主体部とする古墳がある。

奈良時代の寺院は福田の無量寺跡で多数の瓦が出土している。八千種の福井谷遺跡は窯跡で鶴尾を焼成していることで注目される。奈良時代の遺構は矢口遺跡の掘立柱建物だけであったが、最近の調査によって高岡の各遺跡で急激に増加している。生産に関する遺跡が多いのが特徴である。



妙徳山遺跡石棺



東広畑古墳



加治谷藪下五反畑遺跡



妙徳山古墳



## II 調査結果

### 1. 調査の概要

開発予定地の中央南北道路部分を対象とした。北側水田の南側は擾乱が認められたので調査対象から外している。南北に調査区が分かれているので、北区南区として調査を実施した。

#### 北区

道路部分幅6m、南北23mの138m<sup>2</sup>の調査区である。南側5mは擾乱を受けている。第1層は耕土、第2層は盛土、第3層は黒褐色シルト質極細砂、第4層は黒シルト質極細砂、第5層は地山である褐シルト質極細砂である。地山面で遺構を検出した。

掘立柱建物(SB01)は中央北側で検出しており、N28°Eに主軸を有する2×3間以上の側柱建物である。南北3.8mで東西5.4mを測る。柵(SA01)はSB01の東側に位置しているが、近接しており主軸方向も、N20°Eとやや角度が違うことから、時期差があるかもしれない。溝(SD)は4条検出している。SD01は北側で検出した東西方向の溝で、東西とも調査区外へ延びている。幅は東側が0.55mと細く西は0.8mと広くなっている。底のレベルも西が低くなっている。東から西へ流れていたものである。底面は砂礫層である。SD02はSD01南側にある弧を描く全長2.2mの溝で豎穴住居の壁溝の可能性もあるが明確でない。SD03とSD04は2mの間を開けて平行に位置する溝である。落ち込み(SX01)は北壁沿いで検出した方形の落ち込みで北側調査区外に延びている。長さ1.3m、深さ0.65mを測り、埋土は地山土と黒細砂の混じった土で一気に埋められている。埋土の状況は粘土探掘坑に似ている。その他に不定形の土坑、ピットを検出しているが明確な遺構ではない。SB01柱穴からは弥生土器が出土しており、同じ埋土のSA01・SD02も弥生時代中期後半の遺構と思われる。

#### 南区

幅6m、南北48mで東側に突出部のある332m<sup>2</sup>の調査区である。層序は第1層耕土、第2層盛土(2層に分かれる)、第3層暗褐色細砂、第4層黒褐色シルト質極細砂、第5層黒シルト質極細砂、第6層褐シルト質極細砂である。第6層が地山で、北区より第3層が増えている。調査区南端から南側に地形は高くなっている。

検出した遺構は掘立柱建物・柵・溝・土坑・落ち込み・ピットである。掘立柱建物は3棟確認している。SB02は南北2間の5.0m、東西3間の6.9m以上の側柱建物である。主軸はN10°Eである。柱穴から中期後半の弥生土器が出土している。東壁沿いのSP20からは大型壺底部が、SP11からは櫛描き波状文を施す壺破片が

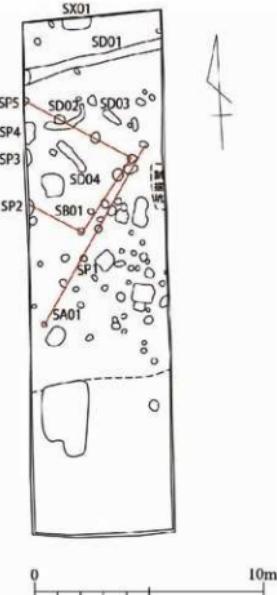


図12 北区平面図



図 13 第 13 次調査平面図

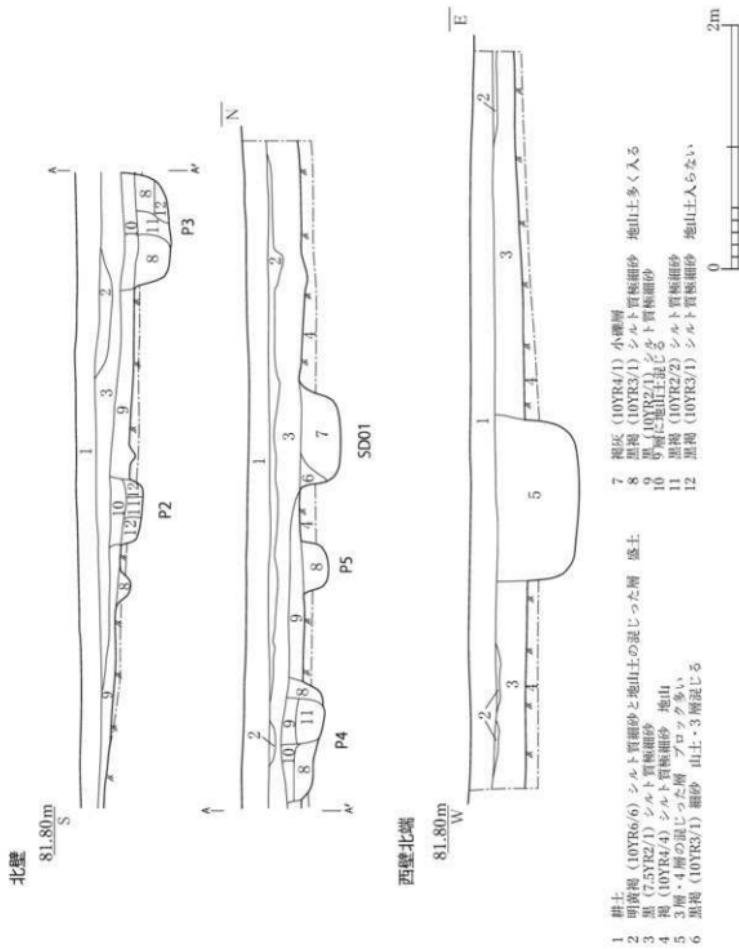
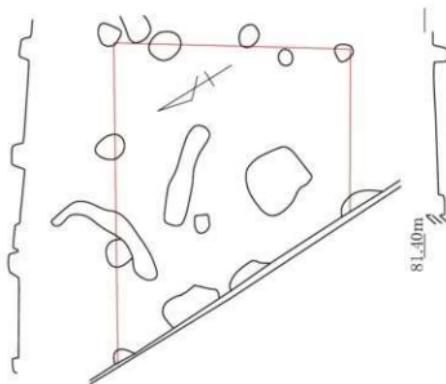
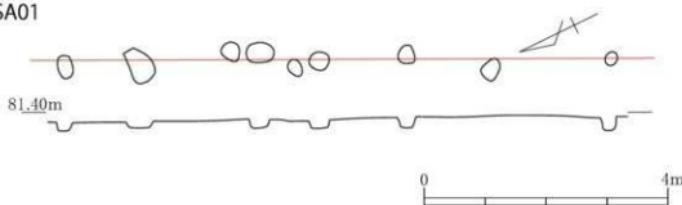


図 14 北区土層断面図

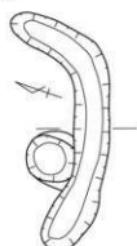
SB01



SA01

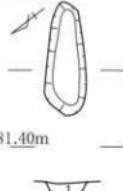


SD02



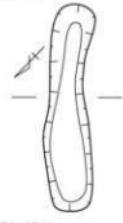
81.40m

SD03



81.40m

SD04



81.40m

1 黒褐 (10YR3/2) シルト質極細砂

1 黒 (7.5YR2/1) シルト質極細砂



図 15 北区遺構実測図

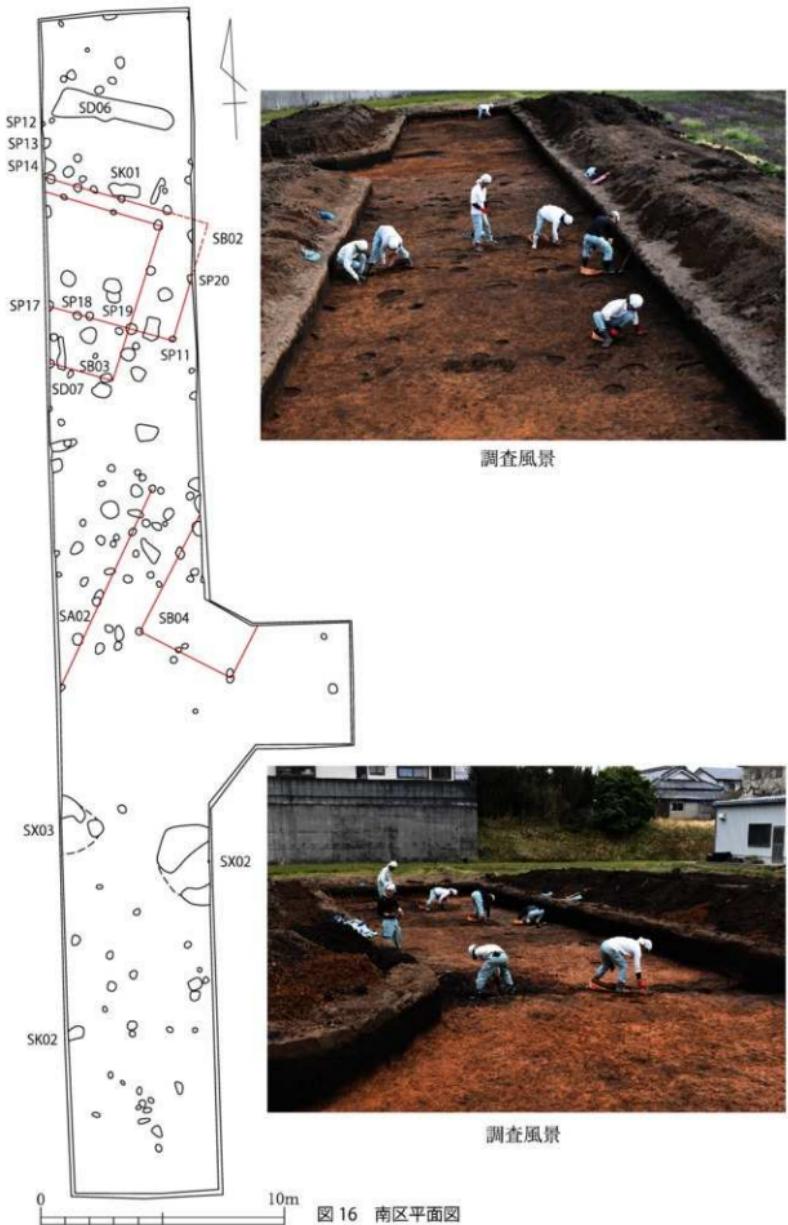


図 16 南区平面図

出土している。径が小さく深いことも弥生時代掘立柱建物に共通するもので、その特徴を示している柱穴である。SB03はSB02と切り合い関係にある掘立柱建物であるが主軸方向が同じことから大きな時期差はないものと思われる。南北3間の6.9m、東西2間の4.8mの側柱建物と思われるが西側に延びる可能性はある。SB04は中央突出部で検出しており、調査区北東に延びている。東西2間の4.2mで南北2間以上の側柱建物である。主軸方向はN20°EとSB02などと異なり、やや東に振っている。

柵(SA02)はSB04西側に位置し4間の9mを測る。主軸方向がSB04と同じことから同時期の遺構と思われる。溝(SD)は2条調査した。SD06は調査区北端で確認し、東西に延びる溝で調査区内で収まっている。SB02・SB03とほぼ同じ主軸になっている。西側が1.3mと広く端部は角張っている。北辺は直線で4.8mの長さを測る。東側端部は丸くなっている。深さは最大で0.3mである。叩き石が

出土している。SD07は長さ0.7m、幅0.2m、深さ0.1mの小規模な溝でSB03の南辺付近にある。土坑(SK)は2基検出している。SK01は北側にあり、SD06と平行にあり、関連のある遺構かと思われる。幅0.3m、長さ0.8m、深さ0.25mの長方形の土坑である。SK02は西壁沿い南側で検出した。幅0.3m、長さ0.6m、深さ0.5mの隅円長方形の土坑である。肩部から直口壺が出土している。落ち込み(SX)は2基調査し、SX02は東壁沿いにある大きな落ち込みである。北側の落ち込みは最大長2.6mの半月形で深さ0.8mを測る。南側の落ち込みは検出長1.5mで深さ0.55mである。2つの落ち込みは一体のもので径3.8mになり、壁に埋土が延びている状況などからも風倒木と思われる。SX03も同

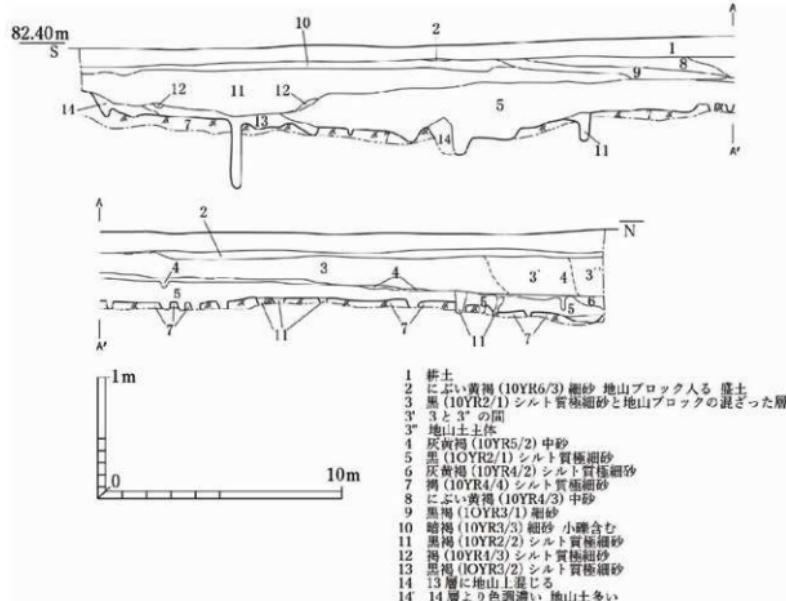
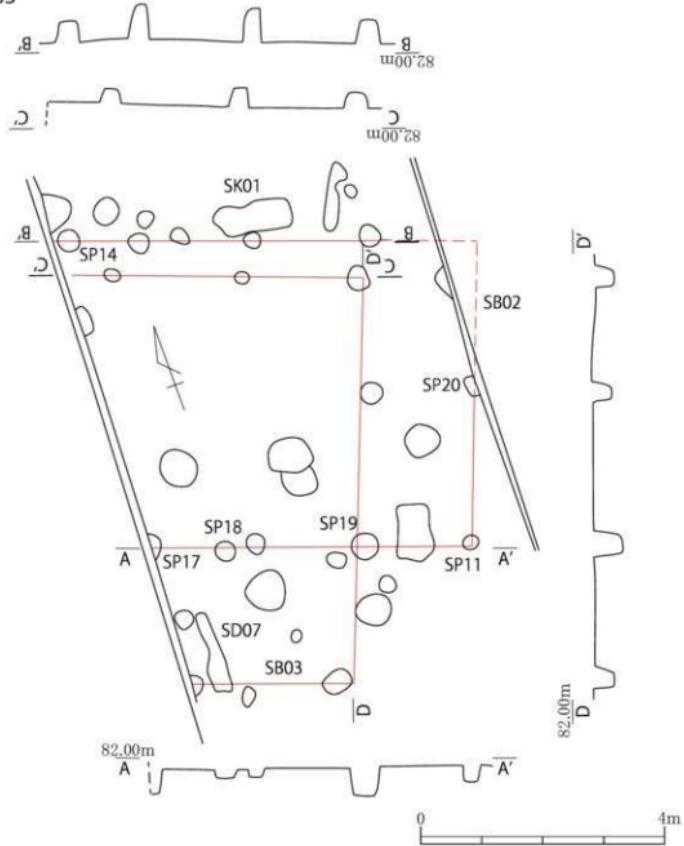
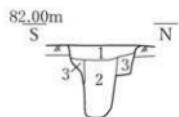


図 17 南区土層断面図

SB02・SB03

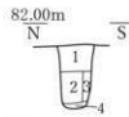


SB02 P17 新断面



- 1 黒褐 (10YR2/2) シルト質極細砂
- 2 黒 (10YR2/1) シルト質極細砂
- 3 2層に地山混じる

SB02 P20 新断面



- 1 黒 (10YR2/1) シルト質極細砂
- 2 黒褐 (10YR2/2) シルト質極細砂
- 3 黒褐 (10YR2/2) シルト質極細砂 (地山土少量入る)
- 4 暗褐 (10YR3/3) シルト質極細砂



図 18 南区遺構実測図 (1)

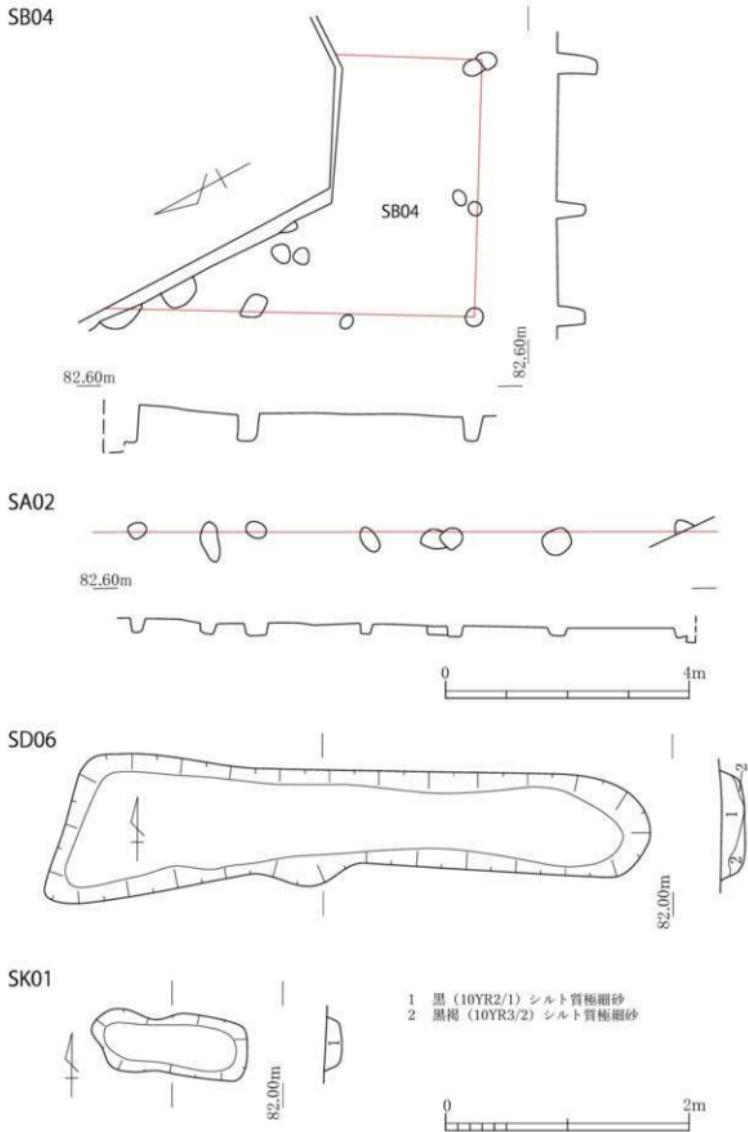


図 19 南区遺構実測図 (2)

様に風倒木で最大長 2.4m、深さ 0.45m を測る。それ以外にも土坑・ピットを検出しているが柵・建物に復元できるものは確認できなかった。

出土遺物は数点の中世須恵器・土師器や近世陶磁器があるが、大半は弥生土器である。遺構から出土したものは弥生土器に限られる。SB02 など柱穴から出土した土器は弥生中期後半であり、後期の土器も少量出土しているので、中期後半から後期にかけての遺構と思われる。

### 3. 遺物

出土遺物はコンテナ 3 箱と少ない。土器が大半で、石器が 1 点出土している。包含層がなかったことから遺物量がすくないものと思われる。遺構の種類もピットが主だったことにも起因する。土器は須恵器・土師器・陶磁器である。

#### SB02 出土土器（1～3）

3 点とも弥生土器である。1 は壺頸部で、頸部下に櫛描き 10 条の直線文と条数不明だが 4 条以上の波状文が施される。残存長 4 cm の小片であるが、焼成良好で精製された胎土の良品である。内面は「げ」仕上げで、外面は丁寧に仕上げており、「け」状になっている。内面は黒褐色を呈する。中期の III 様式古段階。2 は壺底部で外面は縦方向の「け」整形で、内面は「ビ」調整である。「け」整形のち底面は「ナ」調整を施したと思われ、「ハ」が底面すべて切れている。底面には一部「ハ」が見られ、黒斑がある。底面は平坦で体部は外傾から上に向かって反り気味になる。体部外面には茶色を呈する有機質が付着している。火を受けたか吹きこぼれ、もしくは堆積時の付着であろうか。中期後半と思われる。3 は壺体部の小片で内湾する。比較的「タ」字形の平行「タ」字形が認められる。後期前半であろうか。

#### SK02 出土土器（4～8）

5 点とも弥生土器壺である。4 は内湾気味の直口壺で端部角張る。「コ」字形で仕上げており、化粧土が付いている。5 は広口壺口縁部で口縁部下半から頸部にかけて 3 条の凹線文が巡らされている。口縁端部は肥厚し角張る。口縁部内面は「け」整形が施される。頸部内面の稜線は甘く、全体に磨滅顕著である。6 は把手部である。5 と同一個体の可能性がある。断面は隅が丸くなった方形で、破片片面は体部との接合面である。手捏ねで作り、磨滅している。7 は大形の口径 28 cm を測る無頸壺口縁部である。端面が最も器壁厚く角張り、端部肥厚し端面にも 2 条の凹線文が施されることによって中央がやや凹んでいる。口縁端部下から幅広の凹線文 6 条が残存部全体に巡っている。内面は「け」調整で粘土紐の縦ぎ目目瞭然に見られる。8 は大形の壺底部で被熱しており平底である。胎土は精良で内外面とも「ナ」調整である。

#### SD01 出土土器（9）

甕口縁部小片であるが、内湾する変わった形状をしている。端部を上につまみ上げて肥厚させるとによって端面にしている。小石粒多く含む。

#### 包含層出土土器（10～27）

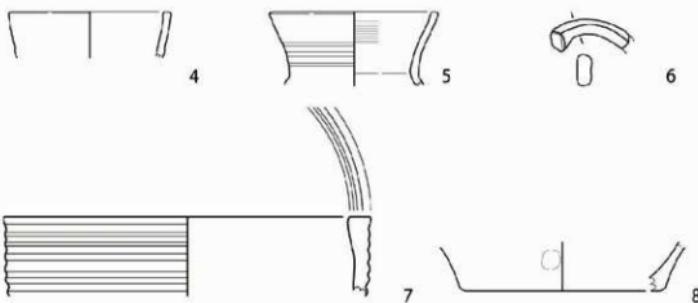
10～13 は磨滅した小片であるが、繩文土器と思われる。すべて破片が小さいことから確実なことは言えないが、10 は沈線を伴う繩文、11 は突帯や稜線部分の刺突文を伴う繩文、12 は突帯や稜線部分の繩文で C 字文があるかもしれない。13 は繩文が施されているように見えるが不明瞭である。

14～20 は弥生中期後半の土器である。14～16 は甕で、14 は内湾する体部から大きく屈曲してバチ形に近い端部肥厚する口縁部になる。体部は内外面とも縦方向の粗い「け」整形で、上部から口縁部にかけては「コ」字形で仕上げる。頸部近く内面は斜め方向の「け」が見られる。口縁端面には 2 条の凹線文が施される。被熱しており、内外面とも有機質が付着している。15 は内湾する口縁部で端部を下方に垂下

## SB02



## SK02



## SD01



図20 遺構出土遺物実測図

している。端面に2条の凹線文が見られ、磨滅顯著である。16は外反する口縁部で端部内外に肥厚し端面に1条の凹線文がある。磨滅顯著だがヨコテと思われる。17は把手で、残存部片側が体部との接合面である。断面楕円形でウ形ののち丁寧にエ仕上げを行っている。粘土をロール状に巻いて製作した痕跡が明瞭である。18・19のプロポーションは異なるが壺底部である。ともに平底で体部外傾する。18の方が緩やかに延び、19は急に上がっている。エ仕上げで磨滅しているが、19はハケ整形かと思われる。20は器台の下台部である。外反し中央に円孔を有する。破片のため個数は不明である。頭部に凹線文が施され、5条以上で上台部まで広がっていると思われる。強く被熱しており、器表が剥離している。石粒を少量含んでいる。

21は高杯脚部で、裾部体部とともに欠けている。裾部の方は大きく延びるように見えないので鉢などの脚台部の可能性もある。22は高杯裾部で外反する。器壁厚く、内面に絞り目が見られる。現状では中空で円板を充填すると思われる。外面には粗いハケが見られる。高杯2点は後期の所産である。23は小さな円孔が見られる破片で把手部であろうか。器種など不明である。下面は土器体部との接合面が剥離したと思われる。

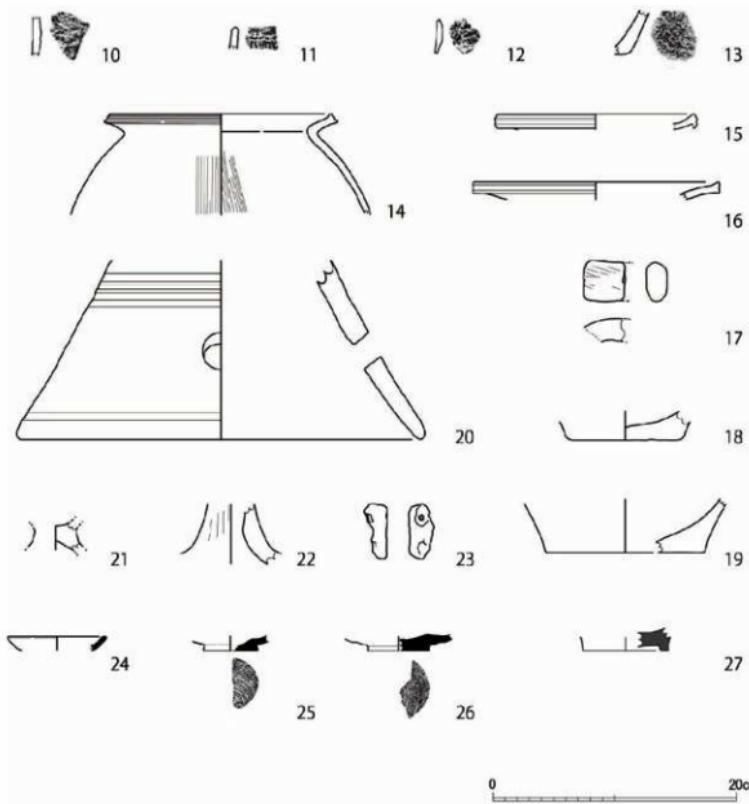


図21 包含層出土遺物実測図

24～26は須恵器である。24は皿で内湾し端部丸く、重ね焼き痕がある。外面に自然釉が付着している。25・26は糸切り底の楕底部である。ベタ高台で「ロクナゲ」である。25は内湾する体部で色調は淡く糸切りの弧間が狭い。26は黒っぽい色調で、底面が水平に延びてから内湾する。底部の厚さからして残存部端が薄い。「ロクナゲ」は強く段になっている。

27は白磁碗である。削り出し高台で高台は断面方形であまり高くない。端面中央がやや凹んでいる。高台部以外の底面には釉薬はかかっていない。

他に図化していないが、サヌカイトフレークが出土している。また、SD05から被熱した円鱗が出土している。表面の痕跡は認められないがタタキ石や台石かと思われる。

番号	種別	器種	遺構	法量 (cm)				調整		備考
				口径	器高	腹径	底径	外	内	
1	弥生土器	壺	南区 P11 SB02 南東		残3.3			直線文、波状文		
2	弥生土器	壺	南区 東pit		残5.8		7.6	ハケメ		
3	弥生土器	甕	北区		残4.0			平行タタキ	ヨコナデ	
4	弥生土器	甕	南区 SK02	(13.0)	残3.8					
5	弥生土器	壺	南区 SK02	(13.0)	残6.1			凹線文	ハケメ	
6	弥生土器	壺	南区 SK02	長残6.4	幅2.55	厚1.2				右半のみ 5と同一個体か
7	弥生土器	壺	南区	(30.0)	残6.5			凹線文		
8	弥生土器	壺	南区 SK02		残4.0		(16.0)	ユビナデ		
9	弥生土器	甕	SD01	(22.0)	残1.9					
10	縄文土器	鉢			残3.2					
11	縄文土器	鉢			残1.8					
12	縄文土器	鉢			残2.9					
13	縄文土器	鉢			残3.7					
14	弥生土器	甕	南区	(18.0)	残8.3			ハケメ	ハケメ	口縁部に凹線文
15	弥生土器	甕	包含層		残1.2					口縁部に凹線文
16	弥生土器	甕		(20.0)	残1.4					口縁部に凹線文
17	弥生土器	把手	南区		3.4×残3.3					
18	弥生土器	壺	南区		残2.4		(9.0)			
19	弥生土器	甕	包含層		残4.5		(13.0)			
20	弥生土器	器台			残9.5×幅8.0		(32.8)	凹線文		
21	弥生土器	高杯	北区		残2.1					
22	弥生土器	高杯	南区		残4.9			ヘラミガキ		
23	土製品		南区		4.5×2.1×1.4					
24	須恵器	皿		(8.0)	残1.1					
25	須恵器	榦	南区		残1.2		(4.4)			
26	須恵器	榦	南区		残1.3		(5.0)			
27	白磁	碗	南区		残1.8		(7.0)			施釉

表3 遺物観察表

### III おわりに

北野散布地は平成8年度に土地区画整理事業に先立つ分布調査で確認された遺跡で、現在までに13次の調査が行われている。分布調査では広範囲で幅広い時代の遺物が採集されており、複合遺跡であろうと思われた。今までの調査でも縄文時代から近世・近代の遺物が出土している。各調査で土坑・落ち込み・ピットなどの遺構は検出されているが性格の明らかな遺構は、第5次調査の竪穴住居と掘立柱建物である。弥生時代後期に集落を構えていたことが明らかとなり、高床と竪穴の両方の建物が確認された。竪穴住居は切り合いと建て替えが認められ、同一地点がある程度の期間生活を統けていたことがわかった。後期後半の時期に限られる。

本報告に係る第13次調査は宅地造成に伴って、第10次調査として確認調査を行い、遺構が検出されたことから、開発部分について令和3年3月に6日間を費やして本発掘調査を実施した。調査面積は470 m<sup>2</sup>とあまり広くないが、弥生時代の遺構を検出した。調査した遺構は掘立柱建物・溝・土坑・落ち込みなどである。遺構出土遺物が少ないことからすべての細かい時期を決定することは出来ないが、概ね弥生時代中期後半から後期にかけてと思われる。掘立柱建物が中期後半と限定され、第5次調査の後期から遡った時期に掘立柱建物が構築されていたことが判ったのは大きな成果であろう。

今期の調査区では明確に弥生中期以前と新しい時期の遺構は確認出来なかったが、周辺の調査例も加味すると前後の時期も遺跡は存在したと思われ、今後の検討が必要かと思われる。今回出土した縄文土器は磨滅が著しいが、前期に遡る可能性がある施文である。押型文や刺突文などとも推定され、古い時期の遺物が出土したことは今後この時期の遺構・遺物の確認に繋がるかもしれない。雲津川沿いは低くなり、弥生時代以降は生産域（水田）と思われるが、周辺地域は全時代にかけての遺物が見られることから、新たな時代・種別の遺構が確認されることが期待される。

# 写 真 図 版



調査前（北から）



北区機械掘削



人力掘削



北壁



SD01（西から）



SD01 東壁（西から）



SX01 検出状況（南から）



SX01（南から）

図版 2



SX01 検出状況（南から）



SD01 東壁（西から）



SB01 南東から



調査風景



P2 断面



P3 断面



P4 断面

図版 4



SD02 アゼ（西から）



SD03 アゼ（北西から）



南区調査風景



南区東壁



南区北壁



SD05 検出状況（東から）



SD05 アゼ（東から）



SD05（東から）



南区全景（北から）



南区全景（南から）

図版 6



SD06 アゼ（北から）



SK01 アゼ（東から）



SB02 SB03（東から）



SB02P20 土器出土状況



SB02P20 土器出土状況



SB02P20 (新) 断面 (西から)



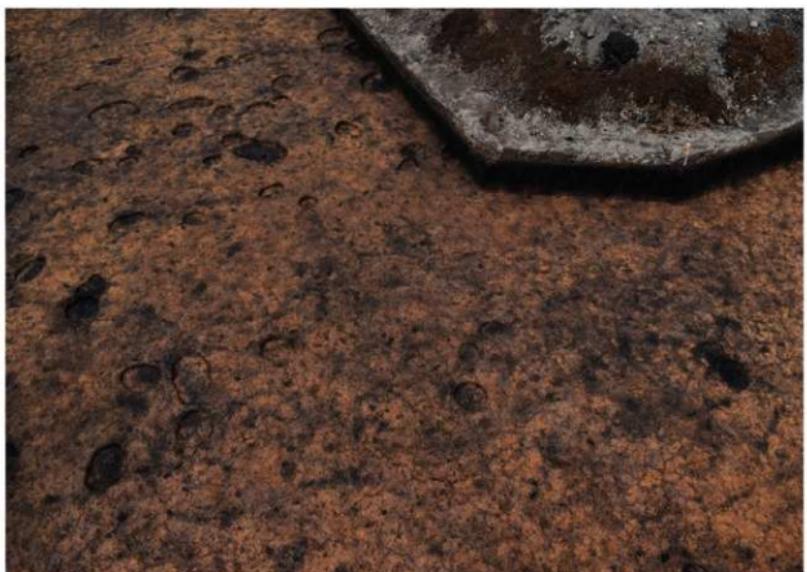
SB02P19



SB02P17 (東から)



調査風景



SB04 (南から)

図版 8



調査風景



SK02 (東から)



SX02 (西から)



SX03 (東から)



南区突出部 (西から)



調査風景



P12 (東から)



P13 (東から)



図版 10



報 告 書 抄 錄

ふりがな	きたのさんぶちだい13じ
書名	北野散布地第13次
副書名	民間開発に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	福崎町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	28
編著者名	渡辺 異
編集機関	福崎町教育委員会
所在地	〒679-2280 兵庫県神崎郡福崎町南田原 3116-1 TEL: 0790-22-0560
発行年月日	2023年3月20日

所取遺跡名	所在地	コード		北緯度分秒	東経度分秒	調査期間	調査面積m <sup>2</sup>	要因
		市町村	遺跡番号					
北野散布地 第13次	神崎郡福崎町西田原	28443	410113	34 度 57 分 21 秒	134 度 46 分 07 秒	2021 年 3 月 8 日 ~ 15 日 (実働 6 日間)	470	宅地造成

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北野散布地	集落	弥生時代 中期後半～後期	掘立柱建物 柵・溝・土坑 落ち込み・ピット	弥生土器 須恵器 土師器 陶磁器	

2023年3月20日発行

福崎町埋蔵文化財調査報告書 28

## 北野散布地第13次

—民間開発事業に伴う発掘調査報告書—

編集発行 福崎町教育委員会  
〒679-2280 兵庫県神崎郡福崎町南田原 3116-1  
印 刷 (株)